2023 年 6 月 11 日（日）「力は弱くとも ～フィラデルフィア教会を支えた信仰～」

ヨハネの黙示録 3:7-13

7 フィラデルフィアにある教会の天使に、こう書き送れ。

『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持つ方、この方が開けると、誰も閉じることがなく、閉じると、誰も開けることがない。その方がこう言われる。 8「私はあなたの行いを知っている。見よ、私はあなたの前に門を開けておいた。誰もこれを閉じることはできない。

あなたは力の弱い者であるが、私の言葉を守り、私の名を否まなかったからである。 9 サタンの集会に属し、自分はユダヤ人であると言う者たちには、こうしよう。実は、彼らはユダヤ人ではなく、偽っているのだ。見よ、彼らがあなたの足元に来てひれ伏すようにし、私があなたを愛していることを彼らに知らせよう。

10 あなたは忍耐についての私の言葉を守った。だから、地上に住む人々を試すため全世界に迫り来る試練の時に、私もあなたを守ろう。 11 私はすぐに来る。あなたの冠を誰にも奪われないように、持っているものを固く守りなさい。 12 勝利を得る者を、私の神の神殿の柱としよう。彼はもう決して外へ出ることはない。そして私は彼の上に、私の神の名と、私の神の都の名、すなわち、神のもとから出て天から降って来る新しいエルサレムの名を、そして、私の新しい名を書き記そう。

13 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。」』

【序論】

この世界に対して教会はどのような影響力を持っているのか。我々はどういう意味で社会に貢献できるのか。教会形成をしていますと、ふとそんなことを考えることがあります。日本におけるキリスト者の数は依然として１パーセントに満たず、教会の統廃合や無牧の問題もよく耳にするようになってきました。風前の灯のような存在にも見える私たちに、一体何ができるのか。

一般的に「社会に対する影響力」と言うとき、第一に思い浮かべやすいのは経済力でしょう。「お金がなければ何もできない（お金があれば何でもできる）」かのような社会が形成されており、教会も確かに「先立つもの」がなければ活動ができません。事実、昨今のインフレによって中小企業が次々と倒産し、大学の閉校も相次いでいるという現実があります。少子化の影響もさることながら、電気代の高騰がもたらしている打撃は大きいでしょう。教会も例外ではなく、考え方を柔軟に変えていかなくてはならない時代がやってきています。

今日は、第一世紀のフィラデルフィア教会が、どのような試練を乗り越えていったのか、また主イエスからどのように評価を受けていたのかを学んでまいりましょう。お金がすべてではないということを身をもって証明した「小さな教会」の残した足跡から、私たちもこれからの時代を乗り越えていくための知恵を得ることができるかもしれません。

【本論】

本論１．フィラデルフィアという町

まず「フィラデルフィア」という町について調べてまいりましょう。この名称はアメリカのペンシルベニア州の都市としても知られていますが、それとは別物です。紀元前 150 年頃、ペルガモの王アッタロス二世フィラデルフォス（前 159-前 138 年）によってこの町が建てられたことから、「フィラデルフィア」と名づけられました。「フィロス（愛)」＋「アデルフォス（兄弟)」から成る言葉で、「兄弟愛」という意味になります。ちなみに、語尾の「ア」は女性名詞である都市名につく文字です。アッタロス二世が彼の兄弟ユーメネス二世に対してささげた忠誠と献身を記念してこの名前が付けられたと言われています。

フィラデルフィアは、位置的にはサルデスの南東 45km の地点にあり、南下していくと大都市コロサイへと通ずる街道沿いにありました。現代におけるトルコ西部のアラシェヒルに当たり、やや内陸部にあります。

この町の主要産業は、農業、皮革(ひかく)製造、織物業などで、特にぶどうの産地として有名でした。それを象徴するかのように、ぶどうの神ディオニュソスが礼拝の対象とされていました。ディオニュソスは、ぶどうの栽培とワイン造りを身につけた神として、ギリシャ神話に出てきます。

前 133 年、ペルガモとともにローマ帝国の支配下に置かれ、ヘレニズム文化の中心地となり、東方への文化拡大の門とされていました。前 17 年に小アジア南西部を襲った大地震によって町は崩壊しましたが、紀元 90 年代までに再建されました。

フィラデルフィアに教会ができた時期は、おそらく第一世紀の中頃。ヨハネの黙示録に記録されている内容が歴史的に最初のもののようです。２世紀の初期には、アンテオケの主教イグナティオスがこの教会に宛てて手紙を書き送っています。

本論２．ダビデの鍵

フィラデルフィアにある教会の天使に、こう書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持つ方、この方が開けると、誰も閉じることがなく、閉じると、誰も開けることがない。その方がこう言われる。「私はあなたの行いを知っている。見よ、私はあなたの前に門を開けておいた。誰もこれを閉じることはできない。（3:7-8a）

語りかけているのは、教会の主イエスです。ここでは主イエスについて「**聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持つ方**」と言われています。この三つの称号について、説明させていただきます。

① 聖なる方

……人間とは「異なった」「分離した」という意味。人間の最終的な行先を決定する神。

② 真実な方

……「信頼できる」「義しい」という意味。ことば、裁き、御業において正しい神。

③ ダビデの鍵を持つ方

……永遠の神の都、新しいエルサレムの門を開く鍵の所持者。「ダビデの鍵」とは、元々王宮の管理の実権を意味した。主イエスはダビデの子孫として、永遠に続く王国を支配するために来られた。

このような「神としての権威」を持つ方ご自身によって、フィラデルフィア教会は開かれた神の国の門をくぐることができると約束されたのです。そして、彼らのために開かれた門を閉じることのできる者はいないと。私はこの箇所を読んでいて、一つの聖句を思い出しました。それは、ペテロが主イエスをメシアと認めて信仰告白をしたときに、主によって宣言されたことばです。

私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上で結ぶことは、天でも結ばれ、地上で解くことは、天でも解かれる。（マタイ 16:9）

ここではペテロに天国の門の開閉が託されていますが、誰がその門をくぐるかの最終的判断を下されるのは主イエスです。主イエスがこの地上にあって天と結び合わせた人は、その門をくぐる特権から外されることはない。フィラデルフィア教会の信徒たちにはその約束が与えられたのです。

本論３．弱者を愛するイエス

あなたは力の弱い者であるが、私の言葉を守り、私の名を否まなかったからである。サタンの集会に属し、自分はユダヤ人であると言う者たちには、こうしよう。実は、彼らはユダヤ人ではなく、偽っているのだ。見よ、彼らがあなたの足元に来てひれ伏すようにし、私があなたを愛していることを彼らに知らせよう。（3:8b-9）

フィラデルフィア教会は、七つの教会の中でも珍しく、スミルナの教会と並んで叱責のことばを受けていません。「**力の弱い者**」とあるように、教会の規模は小さかったようで、想像するところ、家族単位の群、いわゆる「家の教会」が点在していたのかもしれません。経済力に乏しく、礼拝堂というもの自体を持っていなかった可能性もあるでしょう。生きていくのもやっとの状態であっても、助け合い、信仰に固く立っていたのです。そのような生き方ができるということを学ばされます。彼らが追い求めたものは、この世における繁栄ではなく、ただキリストのことばを守り、主の御名を否まないことでした。どこにあっても信仰告白を貫くことは、身の危険に晒される可能性も否めないということです。しかし、彼らは小さな集まりの中で励まし合い、信仰に立ち続けました。

彼らを迫害していた人々がいたようで、具体的には「自らをユダヤ人と自称する人々」でありました。これは、「ユダヤの律法を保持している」という意味で、もう少し突っ込んで言えば「タルムード信者」ということでしょう。モーセ律法を解釈した口伝伝承を周知しているということです。彼らの血筋はよく分かりませんが、タルムード信者になったことで、特権階級に属する者と自負していたと思われます。しかし、パウロは彼らのことを「偽のユダヤ人」と呼んでいます[1]。

フィラデルフィア教会を迫害していた人々もキリスト者を支配しようとしていましたが、何をしても信仰を捨てようとしない彼らに手を焼いていました。主イエスはフィラデルフィアの信徒のことを「真のイスラエル」と呼ばれた。「愛している」ということばはここでは「選び」に近い意味を持ち（イザヤ 43:4)、主がご自分の民として選んだのはフィラデルフィアの信徒たちであると宣明されています。この「力の弱い者」が神の国を相続するようになる。自らをユダヤ人と称する者たちに、この特権は与えられませんでした。「信仰」、そしてその信仰に立ち続ける「忍耐」とは、この世の経済力をはるかに凌ぐものなのです。フィラデルフィア教会の信徒たちは、お金では決して手に入れることのできないものを持っていました。

---

[1] 「タルムード信者」は現代にも形を変えて生き残っており、血筋的にはユダヤ人ではない「ハザール人」と呼ばれる人々がタルムードを所持したことにより、強い選民意識を持って世界支配を目論んでいる。彼らの血筋はバビロンから来ているが、カナン人の宗教的オルギアなる生贄儀式ばかり行なっていたところ、イスラム教徒によって中東を追われ、７～10 世紀にかけてハザールに移り住んだ。カスピ海の北からコーカサス、黒海沿岸に遊牧民族として住み着き、その支配者層がユダヤ教に改宗し、交易によって莫大な富を築いた。これがロスチャイルド家であるが、このようなルーツであるため、彼らは「ユダヤ人」というよりも「バビロン王家」「ニムロデの血筋」と言った方が正確である。コーカサスにはロシア人（スラブ人）がいたため、両者の縄張り争いはここから始まり、それが現代のウクライナ戦争に至っている。ゼレンスキーもハザール系ユダヤ人であるため、民族主義とは根本的に考え方が合うことはない。ハザール人はホワイトハウスに入り込み、アメリカの政治（立法府、マスコミ、行政・司法・官僚機構）を背後で支配し、軍需産業で莫大な富を手に入れるべく世界中で戦争を巻き起こしている。トランプ元大統領が「私が次に当選したらディープステートを一掃する」と言っているのはこの人々を指す。

本論４．試練の時の守り

> **あなたは忍耐についての私の言葉を守った。だから、地上に住む人々を試すため全世界に迫り来る試練の時に、私もあなたを守ろう。私はすぐに来る。あなたの冠を誰にも奪われないように、持っているものを固く守りなさい。勝利を得る者を、私の神の神殿の柱としよう。彼はもう決して外へ出ることはない。そして私は彼の上に、私の神の名と、私の神の都の名、すなわち、神のもとから出て天から降って来る新しいエルサレムの名を、そして、私の新しい名を書き記そう。**（3:10-12）

フィラデルフィアの信徒たちが御言葉を「守った」ことに対する報いとして、迫り来る試練の時の「守り」が約束されています。ここで主イエスは世界規模の試練が襲いかかってくることを前提として語っておられる。この「試練」が何を指しているのかは明らかにされていませんが、第一義的には２世紀におけるローマ帝国によるキリスト者の大迫害が想定されているのかもしれません。敷衍するならば、終末の大患難時代における「聖徒の堅忍」のことが言われているとも取れそうです。その日、試練は世界中の民に襲いかかりますが、信仰に固く立ち続ける人々は、主の御手の中で守られる。その人々には、試練を掻い潜る知恵が与えられるのでしょう。その知恵は、経済力によるものではなく、神の国に属する新しい生き方です。私たちは知らずして、「お金がなければ何もできない」という価値観を植え付けられてきましたが、フィラデルフィアの信徒たちは全く違う生き方でもって信仰の道を歩み抜きました。今私たちに問われているのは、まさにそういうことのように思われます。今一度、文明に頼りっきりの生活を見直し、知恵をもって生き抜き、神の国の市民としての平安な人生を全うしていきたく願います。

主イエスは、信仰に固く立つ人々を「**神の神殿の柱**」にすると言われます。これは、神の支配の満ち満ちた領域、すなわち「神の国」の中心となることを意味するでしょう。更に、彼らには四つの名が書き記されるという約束でもって、今日の箇所は締め括られます。

① **神の名**……神の所有であることの証明
② **神の都の名**……神の国の市民であることの証明
③ **新しいエルサレムの名**……新天新地の市民権
④ **私の新しい名**……贖いの御業が完成したときに見られるキリストの栄光

【結論】

信仰者は、神の国の市民権が既に与られたものとして、地上の生涯を歩むことができる。神の国に属する生き方とはどういうことなのかを一人びとりが考え、新しい生き方を志していきたい。神様の養いに頼り、生きていくための豊かな知恵が与えられることを祈り求め、日々自分にできる精一杯のことに取り組み続けたいと思います。

【祈り】

　この世にあっては力のなかったフィラデルフィア教会を守り給うた主イエス・キリストの父なる神様。私たちもこの国にあって決して大きな存在ではありませんが、彼らが握りしめていたと同様の信仰に生きることができますように。そして、彼らに与えられた祝福の一つひとつを私たちも味わうことができるよう、導いてください。御言葉に忠実に生き、如何なる試練をも乗り越えていく知恵をあなたからいただくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
この世の繁栄ではなく、神の国における繁栄を求めさせ給う、父なる神の愛、
どんなに小さな教会をも、ご自身のからだとして愛し育み給う、主イエス・キリストの恵み、
あらゆる試練を乗り越える知恵を与え、日々信仰告白を新たにさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。